

吃音研究者への手紙……シリーズ

日吃連 望月勝久さんへ

かねてから望月さんと全言連前会長伊藤さんとの論争に注目していました。多分に感情的な対立になっているというようなことも感じていました。しかし、論点は「治す努力の否定」ということを巡ってあったようにとらえていました。ところが、伊藤さんの主張が少しずつ変化している、「吃音者宣言」と「治す努力の否定」ということとの関係がちょっとずつ変化してきているように感じていました。それまでは、吃音治療者を目の敵のように批判してきた伊藤さんが、それはそれとして扱ってくというように変化していると感じていました。ところが、『吃音とコミュニケーション』について数カ月前、「治す努力の否定」ということは、自分たちの真意ではなかった、あれは「振り子の論理」(注)で出したままだ。」という主旨の文が出るにあたって、望月さんと伊藤さんとの間で交わされていた論争は一体何だっただろうと頭を抱えています。

前に国立特殊教育研究所に勤務されていて宮城教育大学に移られたた藤島省太さんが、吃音の第一次障害－第二次障害というような区別を立て、第一次障害を吃音そのものの障害、第二次障害を第一次障害からもたらされた人間関係の障害というような主張をしています。また、そのことは、W・ジョンソンの空間図(注)で、x軸(話言葉の特徴) z軸(話し手の反応)の関係にも通じていることです。どちらに主要に働きかけるかの問題は、それぞれの吃音者問題の押さえ方の違い－考え方の違いがあるにせよ、y軸(聞き手の反応)への働きかけとともに併存しうるはずです。今までの相手を排撃するような論争は一体何だったのでしょう？おそらく望月さんとしては、排撃するような論争を構えてきたのは伊藤さんの方であり、それに応えていただけだと言われるに違いないのかもしれませんが、…。さて実は、伊藤さんとの間で残る論点がもうひとつだけあります。それは最近医学の分野で出され、障害者運動の場面にも援用されているインフォームド・コンセント(インフォームド・チョイス)を巡る論争です。説明と同意(説明と選択)と訳されていますが、治療の「常道」となりつつあるこの概念から言えば、望月さんの「吃音の治療」において、「必ず治る」というような主張はインフォームド・コンセントに外れるのではないかと思います。伊藤さんの批判の核はそのことにありました。しかし、実を言うと伊藤さん自身もz軸への働きかけにおいて、負の側面をとらえないで、正の側面だけ主張するということにおいて同じことをやっています。更に、あの「振り子の論理」自体がインフォームド・コンセントを大きく踏み外した、活動の「常道」を踏み外した論理です。それらのことを考えると、尚更望月－伊藤論争は不毛であったと言わざるを得ません。

勿論、このような文を書いているのは、この論争の不毛性の責任が望月さんにもあると主張するためではありません。このふたりの間の不毛性の責任は主に論点を整理できないまま、というよりも「振り子の論理」などというムチャクチャな論理で混乱を生み出した、「他者を批判する者は、まず自らを振り返れ！」という批判者の「常道」を踏み外した伊藤さんの方にあるとするのが当然だと思います。

ただ、これからが私の望月さんとの対話に入るのですが、私が問題にしようとしているのは、望月さんが治療行為においてインフォームド・コンセントを実行すればそれで万事解決するのか？という問題であり、そのことを巡る論点です。

最近、障害者運動が進む中で、インフォームド・コンセントからインフォームド・チョイスという言葉が使われるようになりました。そこから、もう一歩進んで、形だけのインフォームド・チョイスではなくて真の意味でのインフォームド・チョイスをとの主張が出て来ています。

話が抽象的になりますので、具体的な例を出します。女性の障害者の集まりで、障害者の子宮摘出問題を論じていた時に、自らが子宮を摘出したという障害者が、「今、子宮摘出は非合法で行われていて、危険が大きくなっているので、合法化してみんなが安心して受けられるようにして欲しい！」と提起し、他の出席者から「とんでもない、そんなことをしたら陰に陽に子宮摘出を強要されていく」と反論を受け、議論していく内に提起者もやっと問題点を理解したという話です。インフォームド・チョイスということ言えば、その子宮摘出者もちゃんと説明を受け、自らが選択したに違いありません。けれど、介護の人が集まりにくいとか、その介護者が真の意味で共に生きるという姿勢を作れていないなどから（具体的には生理の介護でいやな顔をされるとか）、月経があるということが面倒と感じ、自らが選択して摘出に及んだというのではないかと思います。障害者への（差別的）役割期待として、「社会に迷惑をかけないで、社会の片隅で生きよ！」ということがあり、その役割期待に沿って、その考え方を自らのものとして役割遂行してしまったのではないのでしょうか

さて、この問題を吃音者の問題に引き寄せて考えてみます。

最近、話し方教室というのがあちこちで開かれています。この中には、吃音者や言語障害者、またはそれに類する人達も参加しているようですが、趣味の類いで参加している人達も見られます。趣味の類いで参加している人たちにとって明らかに、これは自らの選択と言えます。しかし、吃音者にとってはどうでしょうか？ここには、陰に陽に吃らないで話す、スムーズに話すということを強要されているということがあるのではないかと思います。障害者に対するもう一つの（差別的）役割期待「障害を克服し、社会に役立つ存在になれ！」という役割期待に応えた、いかに健常者に近づくかというところでの役割遂行としてあるのではないのでしょうか

このような主張をすると又、望月－伊藤論争のぶりかえしか？と懸念されるかも知れません。私は、現代的には、吃音の治療ということを手から否定できないと思っています。

「吃音が否定的にとらえられない社会を実現しよう！」という私の主張する運動の展望ははっきりと提示できない状況で、ジョンソンの空間図そのものが成立しえない社会が実現できる展望を端的に示し得ないで、今、現実はどうするのか、という問題がたってしまうのは当然だと思います。吃音者がそれぞれに日常的に吃音の回避行動をとってしまっているということと同じように、 $x \cdot y \cdot z$ 軸それぞれへの過渡的な働きかけがなされること

が必要になってくるでしょう。しかし、これでは悪無限的繰り返しの「対処療法」に終わってしまいます。そこで、「うまく行って」個々の吃音者の問題の軽減は計られるとしても、吃音者問題の真の解決—吃音者総体の問題の解決はみられるとは思いません。しかも、百歩譲って吃音者の問題の解決の「対処療法」が見つかったとしても、言語障害者総体の問題の解決とは結びつかないし、まして、障害者問題の解決にもなりません。更に、「吃音の問題が（それなりに）解決したと思ったら、今度は別の問題が出てきた。」ということを考えたら、そして、その別の問題と吃音者の問題がつながっていることとしたらどうでしょうか？仮定の話をしてしても仕方ありません。そもそも「吃音—吃音者問題とは？」ということがそこでは問題になると思います。そのことを私は考え続け拙い文を書き続けてきました。その文を読んでもらえたらと願っています。

ここでは話をまとめるにあたって一言だけ提起しておきます。望月さんのいくつかの文章を見ていて感じたのは（例えば金閣寺放火事件に関するコメント）、望月さんが吃音者体験者として吃音者の苦しみや・悲しみへの共感の姿勢をはっきりもたれていることです。長年全言連の会長を担っていた伊藤さんが、明るく前向きに生きる吃音者への共鳴へほぼ終始しているのに対し、吃音者の団体とは一定距離を保っておられる望月さんの方が立場が逆なのにもかかわらず、そのような共感の姿勢をもち続けておられることに感銘しています。そして、そのことが対吃音者へ望月さんを突き動かしているのだと感じています。それでは、もう一歩進んで、吃音者が自らを抑圧されている、吃音をなんとかせよと抑圧される現実に対する怒りへの共鳴をと願うのです！（今になっては、私の読み違えとも思えるのですが、伊藤さんにはこの怒りへの共感があると感じ続けていました。）「怒りを！」というといかにも温厚そうな望月さんは「人を呪わば・・・」と否定されるかも知れませんが、人に対する怒りということを超えて、現実の問題をとらえ、その問題の矛盾を憎み解決に進むことこそが、問題解決の途だと思っています。

長々とまとまりのない文になりました。吃音者への思いをもたれている人だとの私の思いから、その望月さんの熱い思いに依拠して、もう一歩踏み込んだ観点をもたれての今後の活動をと願っています！

（注）「振り子の論理」

『吃音とコミュニケーション』NO. 48号参照

杉本 博幸（東京）

1994. 2. 6

（全言連への対話シリーズ 『吃コミ』 への投稿 ）